

ほっかいどう N I E 通信

Newspaper in Education



発行 北海道NIE推進協議会

〒065-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内

TEL 011-210-5802 FAX 011-210-5826

「読む・書く・考える」力磨く

実践校でNIE授業スタート

本年度の道内のNIE実践校の多くは、提供された新聞を多角的に活用するNIE授業を2学期からスタートさせた。担当教師たちは各教科や総合的な学習の時間などで、適当な新聞情報を選んで生きた教材として活用し、子供たちの「読む力」や「書く力」、「考える力」をはぐくんでもらおうと熱を入れている。

道内の今年の実践指定校は計32校(小5校、中17校、高10校)。このうち昨年度からの実践継続校である一部の学校はすでに

(十勝管内)・茂岩小は5年生の総合学習で、福祉、ゴミ問題、などをテーマに郷土や全国的な現状を新聞記事を素材にして勉強する。担当の阿部英一教師は「低学年には国語の時間に新聞マンガなども使って、話す、聞く、書く能力を育てていきたい」と話す。

函館・北星小は4年生の社会科で、北海道の農業の現状などについて「関連記事を基礎資料として活用し、子供たちの知識力を高めたい。」(深澤昌明教師)という。札幌・発寒中は2年生の総合学習で「個人新聞」をつくる活動を進める。提供される新聞の紙面構成、見出しや文章表現などを勉強したうえで、生徒がそれぞれに題材を決めて新聞をつくる。「役に立つ情報をつくる。役に立つ情報をつくる。自分のものにしていくか、がテーマ」(荒島晋教師)。

静内中(日高管内)の恩田敏子教師は、3年生家庭科の保育の時間に子育ての問題などを取り上げ、関連する記事を使ってお考え方を深めてもらう。食品添加物、こどもの虐待といったテーマも取り上げていく計画だ。幌延(留萌管内)・問寒別中は総合学習や朝の特活の時間に、新聞を読んで気になる記事を選び出し、感想などを個々にまとめさせる。「情報選択の大切さを学ばせたい」(高橋ひろみ教師)。

帯広柏葉高の田口耕平教師は「新聞に親しむ」、「メディア選択のあり方」、「新聞を読み解く力をつくる」の4つの柱を挙げる。このうち「メディア選択」は、ひとつの記事を選んで新聞各紙との見出しや表現の違いを比較検討し、メディア側の姿勢や情報選択の重要性について学ぶ。

ゆるやかな時の流れを

科学技術の進歩で生活がますます便利になっただけで、このままではいつかどこかに悪影響が生じるのでは、と危惧する人が多い。戦争後、欧米に追いつき追い越せと走り続けた日本は、短期に高度経済成長を遂げた。生産するシステムで、世界一の近代的な社会を作り上げた。

だが1970年代を転機として文明は多様化、個性化、ソフト化、情報化の流れが強まり、資源や環境の重要性に気づき、省資源化の波の中で大量消費、大量廃棄、破壊の見直しが求められてきた。「もっと便利な生活を」となるも効率化を求める声もあるが、21世紀は多少不便でも自然との共生を最適とした環境づくりが期待されている。「便利さの追求が幸せを増やす」と思いこんでいる人の生き方に変革が求められているのだ。

現状はというと、テレビが1台から2台となり、パソコンが生活の必需品となり、家がビジネスホテル化し家族がばらばらになってしまった。携帯電話が滅多に人間関係がスムーズにいかなくなる原因のひとつも生んでいる。

知識や情報の量より、生活のチエを生かすことを求めている。便利さは善と考える人から見ると、そこに背を向ける者は「過去の人間」と笑われるかもしれない。日本経済の停滞に合わせ、ゆるやかな時の流れも新鮮である。(高)



教育とは「覚えさせる」ことではなく、「教え込む」ことでもない、私は確信している。自ら進んで勉強したくなるように誘導することが大切で、これは初等教育にあっても中高等教育にあっても同じだ。



「新聞を読むクセ」への指導

室蘭工業大学教授・国際交流室長 菅野 光公

私は、担当する授業で「時事リポート」を提出させているが、その課題は①先週の世界的出来事で、興味・関心を持ったものを5項目あげよ。

で勝負する(同大学発行)に記述してあるが、その後私のもとに寄せられた何通もの学生からの手紙のひとつ(1部分)を紹介する。

「今まで新聞なんかは、テレビ欄や4コマ漫画くったけど、(時事リポート)の課題のおかげで今では毎日、新聞の1面から目を通したり、インターネットのニュースにも目を通すようになり、こういうことが自然に身について、感謝したくなるような授業でした。(中略)」

私が受けてきた授業の中で後輩たちにも受けてもらいたいベスト1です。お世辞ではないですからね(笑)。

7月7日の北海道新聞NIE特集「若者とメディア」大学の試みの記事を読んで、発見し読んだ学生からは、次のようなEメールが届いた。

『新聞を精読するようにしたのは、実は(室工大での)国際関係論の受講がきっかけでした。講義に

学生様も活動I Nう。だる同じも中高等教育にあっても同じだ。

②そのうちの1つについて、5W1Hにより概説し、あわせて君の意見・感想を述べよ。

というものだ。詳しくは、私たちが出版した『室蘭工業大学はこんな授業

らしいか読んでいなかったり、テレビもNHKなどはほとんど見なかったり、インターネットも好きなアーティストのホームページを見ることくらいでしか活用していな

待といったテーマも取り上げていく計画だ。幌延(留萌管内)・問寒別中は総合学習や朝の特活の時間に、新聞を読んで気になる記事を選び出し、感想などを個々にまとめさせる。「情報選択の大切さを学ばせたい」(高橋ひろみ教師)。

帯広柏葉高の田口耕平教師は「新聞に親しむ」、「メディア選択のあり方」、「新聞を読み解く力をつくる」の4つの柱を挙げる。このうち「メディア選択」は、ひとつの記事を選んで新聞各紙との見出しや表現の違いを比較検討し、メディア側の姿勢や情報選択の重要性について学ぶ。

NIE全国大会に参加して



活発な議論で盛り上がった全国大会

昨年の札幌大会には分科会の司会という立場で参加したが、今回松江大会は一般参加の一人として出席した。オープンセレモニーとして全国唯一の音楽部がある海潮中学校(1998年から4年間、NIE実践校)の海潮神楽が披露され、全国大会に郷土芸能が登場するのは初めてのこと。開催地松江の熱い思いが伝わってきた。全体集会Iでは「生涯学習型NIE」という視点が初めて島根県(保育所)、小学校、中学校が隣接して建つ上

山佐地区の立地条件を生かし、3者がスクラムを組んで子供たちの発達段階や地域住民の取り込んだNIEの取り組みが紹介された。幼児から新聞に親しむ年齢者まで射程におき、位置づける、「地域で新聞社、公民館などがタイアップしてカルチャースセンターを設ける」などのアイデアも出された。幼児、大学生、大人、高齢者までも射程におき、

札幌旭丘高校教諭

高瀬

敏樹

広い視点で創意工夫しながら取り組むことの重要性をうたったもの、地に足がついた島根県独自の取り組みと強い思いが非常に良く伝わってきた。

現場と新聞社との相互交流の成果について報告された。会場からの「なぜ新聞なのか」という問いに、鹿野川喜代美氏(東京・福生第一中教諭)が「新聞でなく

全体集会IIでは「今あらためて新聞を見直す」21世紀型NIEをめざして」と題したパネルディスカッションが行われ、教師側から10数年にわたる実践の成果や教育効果を肌で確かめられる喜び、新聞社側からは受け手(読者)の視点に立った紙面づくりの取り組みや教育

ちゃだめなんです」とその理由も含め自信に満ちた回答をされていたのが印象的だった。2日目の分科会活動では高校IIの分科会に参加した。朝読書ならぬ朝の新聞タイム、株式学習ゲーム、自分史新聞制作など多彩な取り組みが紹介された。全体を通して実質的、建設的な議論が多く交わされ、刺激に満ちた報告が目立った。大会総括でも触れていたが、今後はNIE実践による教育効果を明確に示していくことの重要性が増してくると思われる。

を通したNIE活動の展開と、学校を取り巻く家庭、地域との連携について、実践を紹介しながら成果を披露した。IIでは各パネリストがNIEの取り組みとその成果について紹介。「1つの記事が1人の進路を決めるような力が新聞にはある。子供たちにいい記事を提供してほしい」と新聞側への注文も出された。2日目は小中高各2グループの計6グループに分かれ分科会が開かれ、実践報告に基づきNIEの今後の可能性などについて活発に議論した。中学IIでは伊丹市の中学校教諭が、「分科会の授業」をやろうとしたら、NIEにたどり着いた」と語り、生徒の興味や関心を引き出すには新聞記事を選ぶ教師、生徒双方の「ひらめきの共有がカギになる」と指摘した。高校Iでは「総合的な学習の時間」での活用のあり方を考え、大阪市の高校教諭は3年の英語選択科目で取り組んだ「国際理解」について発表した。大会には道内からも合わせて5人の先生が参加した。

30人余りが参加した。実践報告で、岩見沢市立南小の坂下賢一教諭が6年生の国語科で教科書と新聞記事を併用した授業について発表。同市立清園中の清藤真智子教諭は、北海道新聞朝刊の「みらい君の広場」を読んで感想を書かせる「10分間1000字」の実践成果について「子供は他者の意見を読んでいる、自ら気付き、変容していくものであることを目の当たりにした」と報告した。

「生涯学習型」を提唱

松江でNIE全国大会

見直す「21世紀型NIEをめざして」の2部構成で行われた。Iでは同県内の小学校教諭が、幼児から大人まで生涯

岩見沢でNIEセミナー

第1回「岩見沢・空知NIEセミナー」(北海道NIE推進協議会主催)が7月19日、北海道新聞岩見沢総局会議室で開かれ、5人の先生が新聞を

授業に使った工夫例やカベ新聞づくりの成果などについて実践報告した。

空知管内の小、中、高校教師や空知教育局、岩見沢市教委の指導主事ら

奈井江商業高の佐藤啓貴教諭は過去7年間の新聞記事活用を具体的な例を「初級編」「中級編」に分けて紹介、「高校に入学して新聞を読んだことがない生徒が大変多い。小中学校の先生はあらゆる機会をとらえ、新聞を目に触れさせる授業実践をしてほしい」と訴えた。

第8回NIE全国大会が7月31日、8月1日の2日間、島根県松江市内で全国の教職員、新聞関係者ら約600人が集まって開かれた。大会スローガンは「明日に生きる力はぐくむNIE」学校・家庭・地域とともに。学校を取り巻く家庭や地域の人びとも巻き込んだ、すそ野の広い「生涯学習型」のNIEが提案されたのが特色だ。初日の開会式で箱島信一・日本新聞教育文化財

団理事長(朝日新聞社長)が「NIEを通じて、子供たちがもっと活字に親しみ、社会に目を開くようになってほしい」とあいさつ。次いで藤岡大拙・島根女子短大校長が「古代出雲の実像に迫る」と題して講演し、新聞が伝えた近年の大発見を追いつながる神話の地で繰り広げられる古代ロマンを熱く語った。全体集会はI「NIE・子どもから大人まで」II「今あらためて新聞を

見直す「21世紀型NIEをめざして」の2部構成で行われた。Iでは同県内の小学校教諭が、幼児から大人まで生涯

授業に使った工夫例やカベ新聞づくりの成果などについて実践報告した。

空知管内の小、中、高校教師や空知教育局、岩見沢市教委の指導主事ら

札幌真栄高校

実践校
ルポ

実社会に目を向けよう

札幌郊外、緑豊かな地域にNIE実践2年目の真栄高校(伊藤将敏校長、生徒数1057人)がある。「優しい心」と「優しい力」が学校のモットー。生徒の多くは進学を希望しているため、NIE授業は一人ひとりの「進路」に密着している。

(北海道新聞NIEスタッフ・江本 麻貴)

進路指導と密着させ

昨年のNIE実践は1年生が現代社会、3年生は倫理、政経と計9クラスで取り組んだ。新聞社から提供された新聞を毎朝、各クラスに配布して自由閲覧してもらい、新聞を「読む力」を養うとともに社会への関心をもっと高めてもらう狙い。

「読む力」を高めるために授業もいろいろ工夫がなされた。1年生では教科書の進度にそって新聞記事にあふれている時事ニュースを教材活用し、学期末テストの出題にも使った。先生方それぞれ手法は違うが、全クラスが同一のプリントを利用することで話題が共通化し、学習内容が深まったという。また、3年生の選択科目世界史では「歴史にふれる旅」という



休み時間に教科書から目を離し、手づくり新聞を読む生徒たち

昨年、実践の中心だった平野道雄教諭は今年、担任の2年生の教室に自作の手づくり新聞を張り出している。たとえば室蘭工大も加わった産学共同チームが、微生物を利用し、て工業排水中の内分秘かく乱物質(環境ホルモン

の一種を無害化する浄化装置を開発した、という新聞記事を取り上げ、記事下に「頑張っている大学!! キーワードは「産学」産業・学問。学問は学問のためのみにあらず!!」の文字が躍る。

同教諭は「今の社会に積極的に目を向けてほしい」と手づくり新聞の狙いを話す。

NIE授業に意欲的な荒川道久教諭(1年生社会科担当)は、夏休みの課題に新聞記事の切り抜きを取り上げた。テーマは自由に選ばせ、切り抜いた記事への意見、感想を書かせた。同教諭は「生徒たちは『こころ』ということばに非常に関心が高い」という。また「2学期からは進路指導で新聞コラムを活用し、小論文練習に役立てたい」と話している。

活発な記者派遣で成果

毎日新聞社のNIE活動

「新しく正確な情報を知らせる仕事の大切さを実感しました」「今までとは違う新聞の読み方ができそうです」

今年6月、ある道立高でジャーナリズムの仕事について話した記者に寄せられた、生徒たちの感想です。記者は「とてもうれしい。仕事の励みになる」と、再度教壇に立てる日を心待ちにしています。

新聞社側から見たNIE活動の柱の一つが、この記者派遣です。毎日新聞では札幌の支社を含め、東京、名古屋、大阪、北九州の各本社に窓口を置いています。クラスの記事、新聞記者の仕事の紹介、戦争現場の報告、北朝鮮問題など、テーマに合わせて政治部、外信部、社会部などから講師を選んでいきます。社内で



記者に寄せられた生徒たちの感想

もスペシャリストと目ざされている人が講師にふさわしい場合は、他本社の記者を道内に派遣することを行っています。

派遣は記者にとっても貴重な体験です。日ごろ紙面で訴えていることを、生の言葉で分かりやすく伝えるのは、並みの作業ではありません。「教壇に立つてみると教師の苦労が実感できる」「学校でいろいろ工夫されていることがよく分かる。記者が手助けできることも、たくさんあるのではないか」。派遣のベテランはこう感想を語っています。

毎日新聞のNIE活動のもう一つの柱は、紙面を通して読者と交流し、意見交換する紙面作りです。週に1回「教育の森」という特集ページを設け、教育現場の悩みや課題、取り組みを紹介しています。時には記者も一緒に考えます。月刊学習誌「月間ニュースがわかる」には、編集委員として先生方に協力してもらい、児童・生徒も紙面作りに参加しています。

松江で開かれたNIE全国大会で、パネ

リストの教諭が本紙についてこんなエピソードを語ってくれました。「アフガン難民の子供たちの姿を伝える記事をきっかけに、記者と中学生が交流を始め、生徒の絵手紙が現地に届けられた」。この記者は会社からの派遣の枠を越え、一人の新聞記者として大阪本社から都内の中学校に向かい、いま子供たちと社会をつなぐ新聞であり続けた。私たちはそう願っています。(毎日新聞北海道支社報道部副部長・上田武司)

△原稿を募集▽

学校現場からの投稿を歓迎します。NIE関連のほか学校経営や児童生徒の指導、父母・地域の話題などについて400字前後にまとめてください。学校名を含め原則実名としませんが、希望により匿名も可。ただし原稿には電話番号を明記してください。採用分には2千円の図書カードを贈ります。宛先は〒065-0871 札幌市中央区大通西3-6北海道新聞社内、北海道NIE推進協議会事務局(電話011-211-5802、FAX011-210-1210-5826)にフロッピー処理して送ってください。

「イラク」に厳しい反応

「イギリス出前講座」報告

6月中旬から10日間、メディア教育の先進地・英国の3つの現地校を訪ね、教壇に立った。英国への留学経験はあるものの、子供たちに教えるのはもちろん初めて。印象的なエピソードのいくつかを報告したい。

(北海道新聞NIE推進センター委員・阪井 宏)

訪問したのは、オックスフォード市のセント・バーナバス小学校、グラスゴー近郊のレンジー・アカデミー中学校、ロンドンのアウア・レディース・コンベント高校の3

校である。セント・バーナバス小では、授業や全校集会を見学させてもらった。印象深かったのは、先生がたのほめ上手ぶりである。とにかく何でもほめる。

子供のころ、めったにほめられた経験のない私には、気持ち悪いほどの光景だった。感心させられると同時に、「決定的な失敗をしかした時はどうするか」

という疑問を抱いた。いつもおだてられていた子供が、冷酷な現実と直面する。その時、絶望の底に沈む子供をどう救い上げるのだろうか。

全校集会での、女性校長の活躍ぶりに驚きだった。司会役から、各クラスの活動発表への講評まで、すべてをこなす。しかも、活動発表の際、そろそろと前に出てきた約20人の子供たち全員の名を、呼び当てる。

校長は、全校児童180人の名前をすべて覚えていられるらしい。子供の個性を大切にしている英国教育の原点を垣間見た思いだった。

レンジー・アカデミー中では授業前、校内を案内してもらった。案内役は2人の生徒。生徒の目から見た学校の姿は、私にも新鮮で、実に楽しかった。研究室にいた教諭に、即興でインタビュを始めるなど、見事な案内ぶりだった。「来客があれば、いつも生徒に案内させます」と校長。外界と接する機会を与えることで、生徒たちは視野を広げ、自信をつけるこのことだ。生徒への信頼感がこちらにも伝わってきて、うらやましかった。

アウア・レディース高校での、私の授業のテーマは「イラク戦争」。戦争当事者の側である英国の

高校生がどのような反応をするか、まったく予測もつかず、清水の舞台から飛び降りるような気分で校門をくぐった。生徒たちは予想したほど、激しい議論を吹っかけてはこなかった。幸いとはかりに、私は尋ねた。「ところで、君たちは米英軍による先制攻撃をどう思う?」。すると、約30人の全員が、「反対」に手を挙げた。独立心の旺盛なこの国の生徒が、全員一致というのとは異様である。政府決定への強い反発が国民の心の奥深くに渦巻いていることを示しているようで、衝撃的だった。

島根県松江市で開かれた第8回NIE全国大会に参加してきました。道内からも教師5人が駆けつけましたが、地元勢は同県を含む中国地方4県だけで280人余の先生が一堂に会し、その熱気に圧倒された2日間でした。

今大会は地元のPTA連合会が後援に加わり、「生涯学習としてのNIE」を強く打ち出したのが特色。校種のワクを超え、幼児から大人までの長い期間でのNIEを考えていく、というものです。NIEの取り組みが学校の中だけにどまっておらず、家庭や地域への広がりが求められているという、いわゆる「ファミリーフォーカス」の考え方です。

こうしたテーマに基づき、同県広瀬町の児童館の「新聞を使って遊ぶ」という活動成果などが報告され、興味深く聴きました。NIEの新しい方向のひとつとして大いに注目していきたいと思えます。

(S)

先生方がNIEを勉強

胆振教育局が7月下旬から8月上旬にかけて苫小牧市内で開いた小・中・高校教師対象の情報教育に関する「10年経験者研修」に、「NIE講座」が組み込まれ、「来年以降もやってほしい」と受講者らに好評だった。10年研修は道教委が本年度から各教育局ごとに初めて開催している。

胆振教育局の10年研修で

とNIEスタッフ、さらに昨年度まで2年間、NIE実践校だった室蘭栄高の芳沢文明教諭。新聞を活用した授業の内容や成果を紹介しながら、子供たちが情報社会を生き抜くうえで欠かせないNIEの役割や、新聞と教育をめぐる課題などについてレクチャーした。



出前授業を真剣に聞いてくれたセント・バーナバス小の子どもたち

NIE実践校、全国で389校

本年度のNIE実践校は第1次(5月認定)、第2次(7月認定)合わせて全国で389校となり、前年度より21校増えたが、目標の400校には及ばなかった。ただ日本新聞教育文化財団の認定ワクとは別に道府県の推進組織が独自認定した実践校が23校あり、これを加えると412校に達した。

このうち北海道の実践校は30校(小学校5、中学校15、高校10)で前年度より2校増え、都道府県別ではトップ(2番目は東京都の28校)。ほ

かに北海道NIE推進協議会が単独で認定した実践校が2校(いずれも実践継続3年目の中学校)ある。

現在の実践校制度は01年度からの新NIE推進事業3カ年計画に基づいており、最終年度の今年、全国の小中高校総数のほぼ1%に当たる400校を達成する計画だった。しかし、目標達成の前提となる都道府県単位の推進協議会の整備が遅れていることなどから、目標に一步及ばなかった。

なお、推進協議会未整

「NIE講座」は選択コースの情報教育研修に導入され、計2回の講座で合わせて約40人が受講した。講師は北海道新聞の高辻清敏NIEコーディネーター

受講者たちからは「具体的な新聞活用方法や出前講座について知ることができたのは収穫だ」「NIEのことをもっと知りたい」など前向きな反応が目立った。

受講者たちからは「具体的な新聞活用方法や出前講座について知ることができたのは収穫だ」「NIEのことをもっと知りたい」など前向きな反応が目立った。

受講者たちからは「具体的な新聞活用方法や出前講座について知ることができたのは収穫だ」「NIEのことをもっと知りたい」など前向きな反応が目立った。

受講者たちからは「具体的な新聞活用方法や出前講座について知ることができたのは収穫だ」「NIEのことをもっと知りたい」など前向きな反応が目立った。

受講者たちからは「具体的な新聞活用方法や出前講座について知ることができたのは収穫だ」「NIEのことをもっと知りたい」など前向きな反応が目立った。

受講者たちからは「具体的な新聞活用方法や出前講座について知ることができたのは収穫だ」「NIEのことをもっと知りたい」など前向きな反応が目立った。

受講者たちからは「具体的な新聞活用方法や出前講座について知ることができたのは収穫だ」「NIEのことをもっと知りたい」など前向きな反応が目立った。